

## 「さいはひあれと 祈るかな」

県立神戸高等学校長  
新谷 浩一

### ○ 78 回生に伝えたかったこと

過日、開催された県立高等学校のPTA連合会。その冒頭に県全体のPTA会長さんが発した一言は予想外のモノでした。「皆さんは年賀状を続けていますか？」と出席された方々に問われたのです。反応は様々でした。「もう辞めてしまった」という方もおられましたし、まだ続けているという方もおられました。

「年賀状はPTA活動に似ていると思うんです。かつては、あって当たり前のものだったのに、近年いつからか義務のようになってしまった。もともとは気持ちからしていた行為が義務となると辛いですね。やっぱり楽しみだと思って、取り組まないといけな、と思っています」そう会長さんは続けられました。

近年、PTAに加入していただける家庭が減り、活動が困難になりつつある学校もあると聞きます。そんな状況を踏まえてのご挨拶ですね。続いて学校側を代表しての挨拶を求められた私は、やはりアンサーソングで返すべきだなと思い、手元の原稿を端に置きやり、アドリブで挨拶をすることにしました。

「私は年賀状を『書く』派です。しかも2種類を用意しています。一方は親族や旧友あてに用いる家族名義のもので、もう一方はかつての教え子から届いたときの返礼用として用いるものです。最後に担任したり部活動を指導していたのはもう20年以上も前のことですから、彼らは皆、当時の私の年齢をとっくに超えてしまいました。それでも今も『先生扱い』してくれ、こまめに連絡をくれるので嬉しく思っています。『年賀状は人と人の気持ちの繋がり』ですよ。そういう点もPTA活動と似ていますかね」

過去の通信で、教え子からの年賀状をネタにして書いたものがあるので添えておきます。かつて私の学級通信や学年通信などを読んでくれていた教え子のうち、教職を選んだ者は同じように通信を発行しながら、クラス担任などを行っているようです。それは気恥ずかしくもあり、嬉しくもあるものです。少なくとも言葉の大切さは伝え遺せたのかな、と思えるからです。そういうわけで卒業式でも私は78回生に伝えました。

皆さんが今後歩いていく道においては、予測の難しい局面に多々出会うことと思います。その中においても皆さんには、想定外の事象とまっすぐに向き合い対応する力を育み、模範解答のない、正解の解らない不透明な未来を自らの手で切り拓き、地域を、日本を、そして世界を支える人材として組織や社会の中でリーダーとして活躍するとともに、愛おしい、自分ならではの豊かな人生を送って欲しいと願っています。

そのために『心がけてほしい生き方』のひとつは、「言葉を大切に生きていくこと」です。私たちは日々、様々なものに触れ、心が動きます。その心の動きをぜひ言語化する習慣をつけてください。「よかった」とか「よくなかった」とか、そのような言葉だけで日常を語ることはもちろん可能です。それでも年を重ね、やがて自身の歩んだ道を振り返る時、ひとつひとつの場面をそのどちらかの言葉でしか語れない人生は薄っぺらく、味気ないものと思います。一方で、豊かな言葉は日々を豊かにします。

そのときは何の変哲もないように見える一日一日を、いつの日か彩りも鮮やかに語れるよう、書物を読み、語彙を蓄え、目に映るものすべてを自分なりの言葉で記し残してください。そこに在るのはAIなどの人工的なものでは語れない、あなたにしか語れない、生身の自分だけの人生だと思えるからです。皆さんには誰かに「語れる人生」を歩んでほしいと、そう願っています。

そう言ったものの、私にはこまめに日記を書く習慣はありません。手帳にメモを残す程度です。ただ、過去の通信を読むと、そこには20代の私がいて30代の私がいます。今更ながら何物にも代え難い財産ですね。だから余計に願ってしまうのです。言葉を記し遺してねって。ともあれ78回生の皆さん、素晴らしい卒業証書授与式でした。ご卒業おめでとうございます。



# 「何年経ってもなりきれない僕」

高校教育課長  
新谷 浩一

## ○ 教え子からの年賀状を見ていて…

「8年ぶりの中3担任です。時間がなくて最近の学級通信は私の言葉でなく、生徒の言葉ばかりです…」  
「今年度は3年担任。とりあえず自分が18歳の時の担任の先生が書いた学級通信を読み返しました😊」  
「2月からプレ出勤、4月から仕事復帰です。第2の初任のつもりで頑張ります👊」 「先生の紡ぐ言葉が好きだったので通信をまた読みたいです。『10年経ってもこんな気持ちで…』の歌も聴きたいです」

思わず唸ってしまいました。『10年経っても』の歌とは僕がクラス演劇のために作ったほぼ30年前の歌だったからです。しかも、この生徒は当時、僕のクラスではありません。校内ではそれなりに流行っていたみたいです。卒業式の日も、教室で中庭でと至る場所で繰り返し奏でた僕がつくった最後の歌。

## ○ 彼らが憶えていてくれる『10年経っても』の歌の背景

時は平成7年の夏、阪神淡路大震災のほぼ半年後に遡ります。僕が担任をしていた3年5組は文化祭でクラス演劇をすることになりました。オリジナル脚本を創るために我が家に有志が集まり、シナリオ合宿もしました。その作成中に主役の生徒が提案します。「先生、主題歌をつくってくれへん？」と。

僕が曲をつくり始めたのは高校生の頃です。仲間と始めたバンド活動。既成の曲に飽きた僕らは、やがて自分たちで曲をつくり、録音してはオーディションに申し込むようになりました。でも、音楽業界には認められませんでしたね。僕らは高校卒業と同時にそれぞれの道へ。エレキギターをしまいこんだ僕は、キャンプ場でギターをかき鳴らしながら子ども達と歌う、そんな普通の大学生になりました。

「久しぶりにつくるか」そう決めたら動くだけ。劇は合唱で終わる設定でしたから、印象に残りやすいよう『Aメロディ→A´メロディ→Bサビをリピート』と構成を決め音楽室へ。鍵盤を叩きながら主旋律を奏で、ピアノが弾ける生徒に五線譜に落とししてもらいました。歌詞は18歳の詩を28歳で書くのが照れくさかったので、入れ込んでほしいフレーズを生徒から募集し、断片を繋ぎながら仕上げました。

朝が来るのを待ち続けて どれだけ泣いただろう 何のために生きているのか 答えがわからなくて  
声をあげて笑う そんなことさえ忘れていた

通りで子どものはしゃぐ声 窓辺でずっと見てた ささいなことに優しい気持ち 感じてしまうのは  
君を解るまではなかったことさ 君が僕を変えたんだ

踏み出す勇気がないと嘆く そんな毎日で 何が見える？ 何が変わる？ そんなふうには生きてくれないのさ  
10年経っても こんな気持ちで大人になれるなら 君に逢えてよかった

流れる月日は僕らをそれぞれの場所に運ぶ 耳を澄まし 瞳凝らし それぞれの光を探そう  
星の瞬きを忘れるように見失ったもの いつか取り戻したい



僕は僕になるために 君は君になるために 惑いながら 怖れながら この場所を離れていくんだ  
さよならさ さよならさ 果てしない道の前に 君に逢えてよかった 君に逢えてよかった

ギターコードどころか歌詞さえ忘れていた僕は古い通信を引っ張りだし、それなりに再現してみました。「先生っぽさが抜けませんね」周囲からそう指摘される度、僕はひとり思います。すべてはこんな些細なことを30年経っても憶えていてくれる彼らがずっと心の中にいるからだ。加えて20年経っても行政マンになりきれないこんな僕を温かく見守ってくれる事務局の皆様のお蔭でもあるんですかね。